

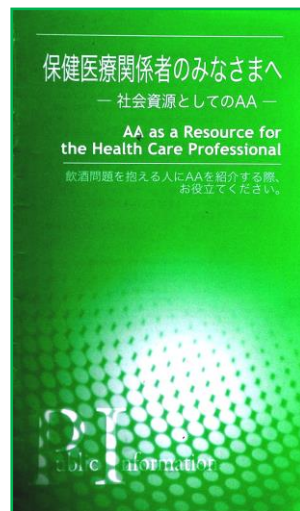
AA 出版物からの贈り物……読んでよかったこの1冊

『保険医療関係者のみなさまへ —社会資源としてのAA—』を読んで

たくさんの支援者の方に読んでいただきたい

滋賀県立精神医療センター
地域生活支援部地域医療連携係

佐藤 周 (精神保健福祉士)



いつもお世話になっております。

この『保険医療関係者のみなさまへ—社会資源としてのAA』を読みながら、10年前、AA滋賀の「オープンスピーカーズミーティング」に初めて参加した時のことを思い出しました。

当時、初めてアクションに携わり、病気という知識もなく、自助グループのことも、なんとなく分かっていないような分かっていないような状態のまま参加いたしました。

そこで、AAメンバーの話聞いて、それまで理解できていなかったことが頭の中にストーンと落ちてきたことを記憶しています。

とても分かりやすかったです。

何故でしょうか？

人は複雑な感情や思考回路を持っているため、体験したことがない事柄に対して、偏見を抱きやすい生き物です。

このパンフレットに書かれている、「AAを拒否するとき、よく言われること」のなかの「宗教的過ぎる・・・」というのは、まさにこのことかなと思います。また、10年前、依存症の本人や支援者の方から、当時言われたことを思い出して、「あー、あったあった。」と思わず笑ってしまいました。そう言われる支援

者の大半は、AAのミーティングに参加したことのない方がほとんどでした。

体験していない者が、体験したことがないことを理解するには、やはり体験した方からお話を聞くことが一番だと思います。

次に“歴史を知る”ことだと思います。

ミーティングへの参加だけでなく、この「社会資源としてのAA」をたくさんの支援者の方に読んでいただきたいなと思います。

まだまだ、“本当の依存症”について知らない人が多いかと思います。

以前、「ニューズレター 滋賀」第41号で“飲まないで生きる”ことの大変さを実感していることをコメントしました。

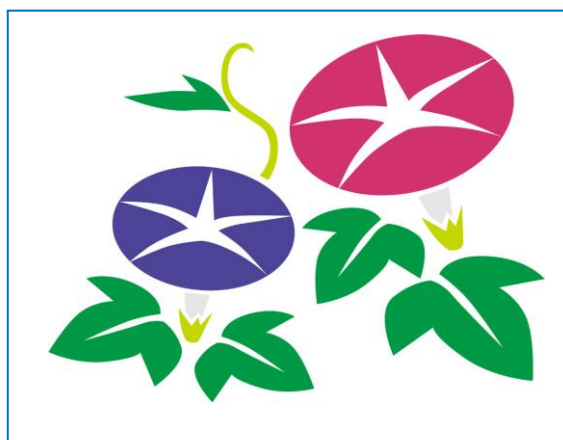
飲まないで生きることは、今まで頼ってきたお酒を手放し続けることです。

しかし、この“手放し続ける”ことは“抗い続ける”ことであり、一人で続けていくことは非常に難しいと私は考えます。

その抵抗を分かち合えるのは、社会資源としてのAAが大きな役割であると考えます。

今日1日ぼちぼちと。

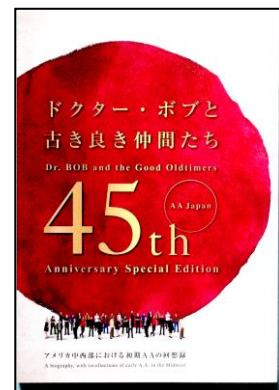
このパンフレットを読んだ感想をお送りし、末筆ながら、AA滋賀に感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。



AA 出版物からの贈り物……読んでよかったこの1冊

毎日少しずつ、楽しく読みました。
『ドクター・ボブと古き良き仲間たち』

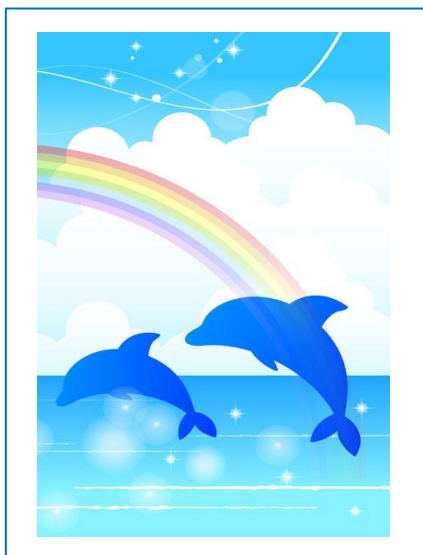
ハグ12すてっぷグループ 裕之



AA 日本 45 周年記念カバ版

私は、この『ドクター・ボブと古き良き仲間たち』を読みながら、私がAAに来て酒をやめて8年目の2000年6月に、アメリカ・ミネアポリスで開催された「AA65周年インターナショナルコンベンション」に参加したときのことを思い出していました。

5日間のイベントが終わっての帰途、現地の仲間誘われるがままにアクロンを訪問し、ドクター・ボブ夫妻が住んでいた「ボブハウス」、AAの共同創始者であるボブとビルが初めて会った「サイバーリング荘」、最初にアルコールの治療を正式に受け入れた病院でありシスターイグナシアとAAの歴史が展示されている「聖トーマス病院」、さらに、ビルが最初の一杯を避



けて電話をかけた「サンフラワーホテルの公衆電話」など、AA初期の歴史に出てくる場所をめくったことが鮮明によみがえってきました。

この『ドクター・ボブと古き良き仲間たち』には、AAが始まった当初のことが、多くの証言で詳しく綴られていて、興味深い読みものとなっています。

ドクター・ボブの人間性が浮き彫りにされ、さらに、出発したばかりのAAが困難な問題を乗り越えてきた歩みが、当時の人々の感情までも含めて伝わってきました。

このボブの本を読みながら、私が痛感したことは、「AAが始まってからの歴史をよく知ったうえで、日々のミーティングやAAのイベントに出ることが大事だ」ということです。

ドクター・ボブは、12のステップの実践の必要を強調し、それは「愛とサービス」に帰着すると述べて、AAメッセージ活動を、自分が飲まないためにも日々やっいてこうと提案しています。

1935年6月10日にAAが発足してから85年が経つこんにち、私自身AAに助けられて、飲まなくなって27年、直接的、間接的にメッセージを運び続けています。

初期のAAメンバーの話に「わざと自宅にウイスキーを置いて自分を試す」と書かれているところを読んだら私共は共感します。お酒から逃げることはできないし、社会全体としても、仕事終わりにとか、お祝い事があるときなどお酒を飲むのが当たり前ですし、それに、私自身居酒屋を今年4月まで約35年間経

営していたので、飲まない生き方を始めてから24年間ほぼ毎日、目の前にお酒がある生活でした。お酒が近くに有る無しにかかわらず、AAでステップをきちんと踏むことによって飲まないで生き続けることができたと思っています。

飲まなくなってから、5年ほど経ったときから、私の責任として、人に言われたからAAのサービスにかかわり続けるのではなく、自分からさせて下さいという気持ちでかかわり続けています。

この本に、初期のAAグループでは、発足してから、たった13年でメンバー数が7万人に増えたと記されています。それから考えると、私は、AAにたどり着いて27年ですが、メンバーの数にあまり変化がないようなので、なかなか巧妙で不可解、厄介な病気だと感じる人が多いです。